知りたいカナダ

カナダの先住民観光

大地の鼓動に触れる旅

オーロラ、ナイアガラフォールズ、メープル街道、カナディアンロッキー……。カナダの大地が育んだ雄大な景観は、世界の人々を魅了し、惹きつけてきた。

そしていま、<カナダの旅>を愛する人たちの間で、静かに熱い視線が向けられているのが、カナダの大地に抱かれてきた「先住民族」が提供する様々なツアーだ。カナダ先住民は、14,000年の長きにわたってカナダの大地と共存し、大自然を生き抜くためのチエとワザを発達させてきた。

そして、その中で、独自の風習や世界観が生まれた。ずっと遅れてカナダにやってきたフランス系やイギリス系の人たちは、カヌーやスノーシューなど先住民のチエを取り入れる一方、先住民の心が生んだ文化を、遅れたもの、野蛮なもの、間違ったものと決めつけ、先住民を、キリスト教を信じ、英語かフランス語かしか話さない人間に変えようとした。

その手段として、先住民の子どもを親から引き離して寄宿舎学校に入れ、その結果、多くの子どもが命を失うという、痛ましい出来事も起こった。

しかし、各地の先住民の中には、どんなに弾圧されても、したたかに文化と伝統を守ってきた人たちがいた。第二次大戦の後の時代になって、先住民の文化が見直されるようになる。多くのカナダ国民が、先住民の文化は、カナダが世界に誇ることのできる、かけがえのない宝だということに気づいたのだ。

同化の歴史を乗り越えた、カナダ先住民。彼らの間では、民族の誇りを大切にしよう、そして、大地と共に生きてきた先人のチエとワザと精神を引き継ぎ、伝えていこうという機運が、大きく盛りあがっている。

その一つの表れが、各地の先住民が運営する文化事業。彼ら自身の文化や歴史を外の人たち、非先住民に紹介するものだ。

「持続可能な開発」が志向されるなど、自然環境の大切さに改めて関心が寄せられる今日、そうしたカナダ先住民が営む各種の事業が、「大地とのつながりを肌で感じたい」という願いに沿うものとして、以前にもまして注目されるようになってきている。

そうした要望に応えるべく、先住民が案内するツアーをはじめ、博物館や美術館、先住民のレストランなど、先住民文化に触れる多様な場が、今のカナダには用意されている。

カナダ先住民が暮らす大地は、海辺、森林、大平原、ツンドラ、極北と、多様な自然環境に彩られている。そのため、先住民の文化も、地域によって大きく異なる。例えばトーテムポールは巨木の生えるカナダ西海岸独特の文化だし、バイソン（野牛）を追っての暮らしが成り立つのは大草原が広がる地域に限られる。

多様な民族が入り混じる「多文化主義」の国カナダ。その中で、他の国から来たのではなく、カナダの大地に根ざした先住民の文化は、カナダだけのユニークなものだ。

カナダに旅したら、各地の先住民の文化にも是非出会ってみたい。

カナダ先住民文化の多様性について

カナダ先住民は大きく３つのグループに分けられる

イヌイット

植物はわずかしか育たないカナダ北極圏。先住民イヌイットは、かつて食物の大部分と衣服の材料を狩りや漁で得てきた。狩りの対象は地域や季節により様々で、アザラシやクジラなど海獣類を獲ることもあれば、トナカイやホッキョクグマなど陸上動物を追うこともある。そうした暮らしから生まれたフードつきの上着「アノラック」は今も世界の寒冷地や登山で愛用され、クローズドデッキのカヌー「カヤック」はアウトドア用具として親しまれている。

遠隔地にあるため外部世界との本格的な接触は第二次大戦後にようやく始まった。しかも農業が難しい風土とあって、その後も狩りや漁に頼る伝統的な暮らしが長く続いてきた。そんな彼らが、長年積み上げた狩りのチエを活かして訪問客をガイドする野生動物ウォッチング・ツアーは人気が高い。また20世紀後半に新しくアートとして興った石の彫刻や版画には、大自然の中で培われてきたイヌイットの世界観や暮らしが活き活きと表されている。1999年に誕生したヌナブト準州は、イヌイットの自治準州である。

独創性のあるアートが注目を集めるイヌイット

ファースト・ネーションズ

北極圏より南に住むカナダ先住民は、かつて「インディアン」と呼ばれた。その言葉から連想されるのは、羽冠を被り、馬に跨って騎兵隊と戦う姿だろう。西部劇が広めたイメージだ。しかし、カナダ先住民には、それとは異なる暮らしと歴史がある。それなのに、「インディアン」と呼ばれ、同じようなイメージで見られるのは不本意だろう。

インディアンに代わる用語として登場したのが「ファースト・ネーションズ」。直訳すれば「最初の国々」だ。一口に「カナダ先住民」といっても、地域によってその暮らしぶりは全く異なるし、同じ地域でも部族(nation)によって言葉や文化が異なる。「ファースト・ネーションズ」とは、最初からカナダに暮らしてきた先住民族に敬意を払うとともに、カナダ先住民の多様性をも反映した用語だと言えよう。

なお、カナダには、先住民が政府との条約によって保障された土地が点在している。そうした土地をリザーブ（居留地）と呼ぶ。

先住民文化を継承し、旅人を歓迎する
ファースト・ネーションズ

メイティ

カナダの歴史で大きな役割を果たしたのが毛皮交易である。交易商は、先住民に鍋や鉄砲、毛布などの工業製品を提供し、代わりに先住民から毛皮を得たのだ。

先鞭をつけたのがフランス人で、カヌーを操って奥地に入り込み、毛皮を集めた。やがて、フランス人男性と先住民女性が結ばれ、双方の血を引く子どもが生まれるようになる。そうした子どもとその子孫は「メイティ」と呼ばれる。イギリスの毛皮交易会社の男たちと先住民女性の間にも同じように子どもが生まれた。メイティは、オジブワ族やクリー族など先住民の文化と、フランスやイギリスの文化が入り混じる、独特の文化を発達させた。

やがて彼らはウィニペグの周辺地域に集まり住むようになり、1870年には彼らの活動によってマニトバ州が誕生。ウィニペグは州都となった。

1982年のカナダ憲法により、メイティはインディアン（ファースト・ネーションズ）及びイヌイットと並ぶ先住民として認められている。

メイティの指導者として知られる
ルイ・リエル（1844-1885）

特集

ピマチオウィン・アキ「生命を与える大地」を旅して

文・写真：大竹英洋

カナダ初の世界複合遺産

日本からアクセスのいいトロントや、首都オタワ周辺に馴染みのある人は多いだろう。しかし、同じオンタリオ州の遥か北西の果て、隣のマニトバ州にもまたがる原生林一帯が、2018年にカナダ初の世界複合遺産に登録されたことをご存知だろうか。

具体的には、ウッドランド・カリブー州立公園にマニトバ州の先住民コミュニティ4つ（ポプラー・リバー、パンガッシ、リトル・グランド・ラピッズ、ブラッドベイン）とアティカキ州立公園を加えたエリアで、総面積は約3万平方キロメートル。実に四国の1.5倍もある広大な森と湖の世界だ。

登録名称は「ピマチオウィン・アキ」。この地に暮らす先住民アニシナベの言葉で「生命を与える大地」を意味する。複合遺産とは「自然遺産」と「文化遺産」の二つの価値を同時に満たすもので、この地球上に1100以上ある世界遺産の中でも40例に満たない。

人口密度が極めて低い辺境の地だが、野生の息づく北国の生態系が残されているだけでなく、そこに暮らす先住民の伝統的な生活や自然観も含めて、ユネスコが世界遺産に求める、人類全体に寄与する「顕著な普遍的価値」が認められたのである。

上／ウッドランド・カリブー州立公園のキャンプサイト。左下／空から見たウッドランド・カリブー州立公園。平坦な原生林に、無数の湖が点在している。右下／ライチョウを模した装束を身にまとった、リトル・グランド・ラピッズ出身の踊り手。

左／壁画の横を通るときはタバコの葉を供えるのが礼儀。右上／水辺で迎える夜明け。小鳥たちの歌声が響く。右下／ブラッドベイン川の岩壁に描かれた壁画。

壁画をめぐるカヌーの旅

そもそも僕がこの地域に初めて足を踏み入れたのは2004年の春。それまでアメリカのミネソタ州に通っていたのだが、とある湖畔で熟練のカヌーイストに出会った。40年以上もカヌーの旅を愛好してきた彼が、この15年はカナダ側のウッドランド・カリブー州立公園を旅のフィールドにしているという。鉱山や木材などの資源開発を禁じ、できる限り人工物を排した原生自然「ウィルダネス」に分類される自然保護区である。初心者にとっては敷居が高いが、熟練者にとっては管理されていない原始の野生そのものを、静かにじっくりと味わえる場所だという。その話に惹かれて、早春の旅に一緒に連れて行ってもらったのである。

未舗装の林道を何時間も車で走り、公園の入り口の一つであるリアノ湖に着いた。つい数週間前までは氷が浮いていた湖。そこにカヌーを浮かべ、3週間分の食料とキャンプ道具を積み込んで出発。これほど早い季節に旅に出るカヌーイストは稀で、途中で誰とも会うことはない。文明の匂いから遠く離れた原野で、この惑星に二人ぼっちのような旅である。

何日も野営を重ねた先で、カヌーの前方に大きな岩壁が現れた。そこにピクトグラフ…かつての先住民による壁画が描かれていた。小さなものであれば、公園内にいくつも存在する。大規模な壁画サイトは、ウィニペグ湖までの主要な移動ルートだったブラッドベイン川沿いに多いそうだ。ウィルダネスでの孤独な旅だと感じていたが、あたり一帯はどこも太古の昔から人間の生活の場だった。

上／この地で生まれたカナディアン・カヌーに乗ると、自然をより近くに感じることができる。
下／描かれた当時のまま、カヌーイストを待ち受ける壁画。

左／ドラムを奏でながら、自らのルーツに想いを馳せる。右上／ヒーリング・キャンプの中央に張られたティーピー。右下／朝の寄り合いでは、ハクトウワシの羽を手に発言する。

断絶された伝統を取り戻す

ピマチオウィン・アキのエリアを保護区にしようという動きは、2002年に先住民たちの声から生まれた。当時、マニトバ州北部でダム建設があり、その電力を運ぶ送電線がウィニペグ湖の東岸、彼らにとって祖先より受け継いできた土地の中を通る計画が持ち上がっていた。いかに開発の手から自然を守るか。コミュニティの垣根をこえて話し合った結果、より国際的な注目を浴びるであろう世界遺産登録を目指すことが決まったのである。隣接する州立公園も主旨に賛同し、オンタリオ州政府と、マニトバ州政府ともパートナーを組むことになった。

先住民が主導するこの活動の中心人物の一人が、ポプラ・リバー出身のソファイア・ラブロースカスだった。彼女は、環境保全を進める一方、寄宿学校で受けた虐待のトラウマ、伝統文化の断絶によるアイデンティティの喪失、深刻な失業率、アルコール中毒など、村が抱える様々な問題を癒すためのキャンプを企画していた。自然の近くで過ごすことで心の傷を癒やし、自分たちのルーツを取り戻す。そんな目的のヒーリング・キャンプは、村から川を遡ったウィーバー湖畔で、誰もが参加できる三泊四日の夏のイベントとして始まった。

ウッドランド・カリブー州立公園でのカヌーの旅にすっかり魅了された僕は、その入り口となる金鉱の町レッド・レイクに2005年秋から一年半暮らした。その間、自分の撮影フィールドが世界遺産登録を目指していることも小耳に挟んでいた。そして2010年、登録に関わる先住民コミュニティの主要メンバーも参加するというヒーリング・キャンプに誘われたのである。

用意されたテントで寝起きし、食事は皆で一斉に取った。朝食後は中央に建てられた巨大なティーピーに集まって寄合が始まる。貝殻に乗せた薬草の煙で体を清め、ハクトウワシの羽を手にした人が発言者となり胸の内を語る。参加者はその言葉に耳を傾け、決して妨げてはならない。その後、鳴り響くドラムのビートに合わせて、伝統の歌が歌われた。日中はカヌーを漕ぐもの、釣りをするもの、森を歩くもの、思い思いに過ごし、夜には浄化と再生を司るスウェット・ロッジの儀式が執り行われた。

これらの儀式や風習は、寄宿学校による同化政策で否定されてきたものばかり。一度は断絶された伝統をもう一度取り戻したい。そうした願いもまた、世界遺産登録を目指す運動の推進力となっていた。

左／スウェット・ロッジ。焼けた石を運んで入口を閉じ、薬草を煮出したお湯をかけて身体と精神を浄化する。中／伝統の歌のほか「ピマチオウィン・アキ」と題した新しい歌も作られた。右／薬草の煙で浄めの儀式を行うソファイア・ラブロースカス。

左／前方に見えるのは、決して指で差してはいけない聖なる島。右上／先住民の村パンガッシ。飛行機しかアクセスはない。右下／川の入り口に置かれた奇岩。あらゆる自然物に精霊が宿る。

自然と文化は切り離せない

2012年、ユネスコのパリ本部へ推薦状が提出され、視察団による現地調査が始まった。だが、登録までの道のりは容易ではなかった。ここでしか見られない固有種がいるわけでもない。ましてや巨大な遺跡や歴史的建造物があるわけでもない。一見すると、ただの茫漠たる広大な原野があるのみ。そこに「顕著な普遍的価値」なるものを、わずかな滞在期間で理解してもらうことは困難を極めた。自然遺産、あるいは文化遺産だけを目指してはどうかという外部の意見もあったが、彼らは信念を曲げなかった。ピマチオウィン・アキという登録名称は、長老たちの寄合で決めたもの。人間はこの大地に生かされている。そう信じるアニシナベにとって、「自然」と「文化」とは決して切り離すことのできない概念であり、当初から複合遺産への登録しか求めて来なかったのである。

ヒーリング・キャンプに参加した帰り、足を伸ばしてパンガッシとリトル・グランド・ラピッズに立ち寄った。何人かがガイド役を買って出てボートを出してくれた。かつてシャーマンたちがドラムを奉納したという島の横を通ったときは、決してその島を指差してはいけないと注意された。次に、丸い石がいくつも置かれた岩壁を案内してくれた。そこにはリトルピープル、つまり精霊の小人たちが暮らしているという。さらに川の入り口に置かれた奇妙な縞模様の岩を見せてくれた。狩りの幸運や旅の無事を祈って、薬莢やタバコの葉やコインが供えてあった。自然の至る所に精霊が宿るとするこれらの風景は、彼らのコスモロジーを共有しない限り、ただ通り過ぎてしまうだけだろう。

リトルピープルが棲む岩壁。

左上／ネットを仕掛ければ魚が豊富に獲れる。左下／ワイルドライスの脱穀風景。右上／シラカバのバスケットに入った野生のブルーベリー。右下／切り倒した枝を運ぶビーバー。

魚を獲り、水鳥を撃ち、ベリーを摘み、ワイルドライスを収穫する。ムースを狩り、ビーバーやマツテンを罠で捕まえる。自然に寄り添う彼らの暮らしぶりを知らなければ、季節によって変化する風景の本当の意味は見えてこない。

人間の暮らしを支える大地との深いつながりを粘り強く説明し続けた結果、ようやく2018年、世界複合遺産の登録に至った。特定の地域での人々の生活や風土と深く結びついた景観を「Cultural Landscape＝文化的景観」と呼ぶ。正式な登録を経た今、このピマチオウィン・アキこそが、まさに文化的景観が残されてきた好例であるとユネスコは謳っている。

左／肉は薄く切り、燻製の干し肉にして保存する。右／狩猟小屋に打ち付けられた、世界最大の鹿ムースの角。

受け継がれる狩猟民の精神

伝統といえど人間の暮らしは絶えず変化していくもの。しかし、子どもの頃から慣れ親しんだ味はそう簡単に忘れることはできない。ピマチオウィン・アキでも、食生活が欧米化するなか、秋になると人々は今もムース狩りに出かけ、その肉を心待ちにしている。

アニシナベのムース狩りに同行したいと願い続け、2018年秋にようやく受け入れてくれる家族が見つかった。39歳とまだ若い家長のバスターは、幼い頃祖父に連れていかれたキャンプ生活を、自分の子どもたちにも体験させたいと願って、狩猟小屋を建てたばかりだった。

彼が生まれたピカンジカムは、ピマチオウィン・アキの計画がスタートしたとき、オンタリオ州から唯一参加する先住民コミュニティだった。しかし、2016年に突然の脱退を表明。その真相は今も不明だが、彼の狩猟小屋はウッドランド・カリブー州立公園の中にある。ファースト・ネーションズと呼ばれる彼ら先住民は、カナダ国家と条約を結び、狩猟の権利が保障されている。そのため、州立公園という自然保護区内でも狩りができるのだ。

バスターの小屋を目指して、水上飛行機で森の奥へ向かった。湖畔の狩猟小屋の周りにはモーターボート、チェーンソー、発電機、洗濯機…と文明の利器が並んでいた。変化の波が押し寄せるムース狩りの現場ではあったが、ひとたび巨大な獲物を仕留めると、家族総出で肉の解体と燻製が始まった。バスターはオスの喉の下に伸びる肉垂れを切り取って近くの木に捧げた。理由を聞くと「ずっとそうしてきたから」との答え。ムースの解体は作業ではなく、大地から生命を頂く儀式なのだ。

数日後、出来上がったばかりの燻製肉を子どもたちが口に運んでいた。森が育んだムースが体内に取り込まれ、彼らの血となり肉となってゆく。狩猟民の精神は、こうした体験のなかで受け継がれてゆくである。

上／切り取ったオスのムースの肉垂れを森に捧げるバスター。中／広葉樹の生木を燃やして、数日燻煙する。下／ムースの干し肉を食べるバスターの末息子。

左／先住民アニシナベは8000年以上に渡って、この自然とともに生きてきた。右上／ムースの狩猟に出かけるバスターとその息子達。右下／ブラッドベインの近くにある顔に見える巨岩も信仰の対象である。

未来に向けて

世界遺産に登録されれば保全活動は終わりではない。むしろ、ここからが本当のスタートだ。アニシナベに古くから伝わる教え「ジガナウェンダマン・ギダキィミナン」つまり「大地の世話」を実践に移すため、すでにガーディアン・プログラムというものが始まっている。各コミュニティから狩猟や自然に通じた者を募り、環境に変化がないかユネスコへ報告するためのモニタリングの役目を担ってもらうのだ。ガーディアンに選ばれることは、誇りでもある。

ピマチオウィン・アキの4つの先住民コミュニティのうち、通年道路でアクセスできるのはブラッドベインだけ。それ以外は、湿地や湖が凍る厳冬期にのみ通じるウィンターロードを使う以外、飛行機でしか訪れることができない。そして、ウッドランド・カリブー州立公園もアティカキ州立公園も、バックカントリーでの旅の技術を要するウィルダネスである。ピマチオウィン・アキを訪れるには、それなりの準備と旅のスキルが求められるが、僕にとっては遠く日本から通い続けるのに値する、憧れの場所であり続けている。

ブラッドベインのガーディアン、メルバ・グリーン。

地平線の彼方まで森と湖の世界が広がる。

カナダ先住民の文化に出会う

1 史跡探訪

14,000年前からカナダに住み続けてきた先住民は、それぞれの土地に様々な「遺産」を残している。ユネスコの世界遺産に登録されているものも数多い。また、カナダ史の礎となった毛皮交易で、先住民とヨーロッパ系の人たちが交流した「交易砦」には、コスプレのスタッフが案内する「歴史のテーマパーク」となっているところも少なくない。そうした「カナダ史のふるさと」を探訪し、カナダの生い立ちを体感しよう。

2 野生とのふれあい

カナダの大自然を、野生の動植物についての深い知識に頼って生き抜いてきた先住民たち。彼らの暮らしと文化の核にはいつも「自然」があった。そんな先住民の案内で自然に分け入り、野生動物や野鳥を探索したり、彼らの自然観に触れたりすることは、他では得られない貴重な体験だ。カナダには、ホッキョクグマ（シロクマ）、ハイイログマ（グリズリー）、クロクマ、ヘラジカ（ムース）、ビーバー、クジラ、アザラシなど、独特の野生動物が多く住む。動物だけではなく、薬草や食用植物など野生の有用植物について現地で学ぶのも、貴重な体験。

3 アウトドア活動

カナディアンカヌー、カヤック、スノーシューなど、カナダ発のアウトドア文化は、もともと先住民の暮らしから生まれた。今も狩猟や漁を生活の糧とする先住民は少なくない。そうした活動が、伝統的な暮らしの中に根付いてきた先住民と一緒に釣り、カヌー、スノーシューによるトレッキングなどのアウトドア活動を楽しんだり、独特のアウトドア術を教わったり。カナダの大自然との一体感を味わう旅。

食の観光

カナダには「先住民料理」のレストランが点在している。極北のカリブー（トナカイ）やホッキョクイワナ、太平洋岸のサケ、大平原のバイソン（野牛）など、地域の先住民が伝統的に利用してきた食材を、先住民の料理人が現代風にアレンジして供してくれる。カナダの大自然が生んだローカル色豊かな先住民料理は、歴史ロマンと大地の香りがスパイスだ。

4

5 先住民体験

先住民の集落で、ティーピーやイグルー、ロングハウスなど伝統的な住居にひと夜を過ごす。焚き木を囲んで長老の語る神話・伝説に耳を傾ける。一緒に馬に乗ったり、カヌーを漕いだり、犬ぞりを使ったりして、彼らが大昔から暮らしてきた大地を探索する。そんな、先住民の世界にどっぷり浸かるディープな体験は、生涯の想い出になるだろう。

カナダ先住民の文化に出会う

6 クラフト

モカシン、スノーシュー、樺皮細工、ドリームキャッチャー、木彫りの仮面、ビーズ細工を施したレザーバッグetc.　カナダ先住民の工芸家が作る伝統的なクラフトの数々。先住民のアート＆クラフト･ショップを訪ね、カナダならではのユニークな工芸品をゲットしよう。

7 アート

1960年代以降、伝統的な自然観・価値観を現代アートとして表現する先住民アーティストが次々に誕生し、今日に至っている。バンクーバー国際空港の至る所に先住民作家の作品が展示されている状況は、先住民現代アートがカナダを象徴する存在になっていることを端的に表している。首都オタワのカナダ国立美術館でも先住民アートは大々的に展示され、ウィニペグではイヌイット・アート専門の大きな美術館「カウマヨック(Qaumajuq)」もオープンした。美術館などで、先住民の現代アートに触れてみよう。

8 先住民カジノ

大都会の郊外に開設された先住民カジノに行けば、先住民のアートや工芸品に触れることもでき、「先住民カジノで楽しむ」というちょっと変わった体験ができると同時に、地域の先住民の経済を潤すことができる。

9 博物館

大都会でもできる最も手軽な先住民体験は、博物館を訪ねることだ。歴史博物館や民族学博物館では、先住民の歴史と文化を、遺物を通して具体的に学ぶことができる。
展示物の紹介を先住民自身が担当する施設も多い。そうした施設では、「モノ」だけではなく、当事者の口から彼らの歴史・文化、そして現状を聴くこともできるのだ。

10 パウワウ

北米インディアンの歌と踊りのお祭り「パウワウ」。アメリカから伝わり、今ではカナダでも多くの居留地や周辺の町などで催されている。メインイベントは踊りのコンテスト。いくつかの部門があり、踊りの技を競う。コミュニティごとに毎年開催の時期が決まっているが6～9月の週末に開かれるケースが多い。観光客も歓迎のオープンなお祭りで、ハレの日の先住民に出会うにはもってこいのイベント。

11 イベント

町によっては、パウワウとは別に、先住民関連のイベントが開かれる。例えばモントリオールでは毎年7月末～8月上旬頃、先住民族フェスティバルが10日間に渡って開かれ、先住民音楽のコンサート、映像作品コンテスト、先住民の踊りの大会、展示会、セミナーなどが催される。

先住民の暮らしと文化

カナダ先住民の暮らし（文化）は大きく7つに分けられる

{1} **極北（北極圏）のイヌイット** ｜一年の大半を雪と氷に閉ざされたツンドラ地帯の狩人

{2} **亜極北のファースト・ネーションズ** ｜針葉樹林が果てしなく広がる北の森タイガに獲物を追う

{3} **東部森林地帯のファースト・ネーションズ** ｜森と湖の恵みを追う。定住してトウモロコシなどを育てた人たちも

{4} **大平原のファースト・ネーションズ** ｜ロッキーのすそ野の大平原にバイソン（野牛）を追う

{5} **高原のファースト・ネーションズ** ｜ロッキーの山岳地帯に大自然の恵みを追って暮らした先住民

{6} **西海岸のファースト・ネーションズ** ｜海産物をベースに豊かな暮らしを送りトーテムポールを彫る人たち

{7} **毛皮交易から生まれた民族集団メイティ** ｜ヨーロッパ系の交易商と先住民の間に生まれた人たち、およびその子孫

先住民の国
ケベック・ワンダケ

ケベック市内に先住民の国!?

400年以上の歴史を誇るカナダの古都ケベックシティ。旧市街には古い建物や洒落た店が立ち並び、日本からの旅行客にも人気が高い。

セントローレンス川に臨む古都ケベックシティ

旧市街

洒落た店が立ち並ぶ

その旧市街から北西へ15kmほど、行政区域でいうとケベック市内のラ・オート・サン・シャルル区に、先住民の国ワンダケ(Wendake)がある。

ケベックシティの中央に位置するワンダケ。面積は4.4㎢

「先住民の国」とは、ものの喩えではない。英語の正式名称を「ヒューロン・ウェンダット・ネーション(Huron-Wendat Nation)」といい、議会もあれば首長もいる。いわばカナダの国内国家だ。

ワンダケの入り口。教会が見えている

ヒューロン・ウェンダット国の役所

かつて「インディアン」と呼ばれたカナダの先住民は、いま、「ファースト・ネーションズ」と呼ばれる。カナダ国内には先住民の様々な「ネーション(国)」があるのだ。「ヒューロン・ウェンダット・ネーション」はその一つである。「ヒューロン」とは当地の先住民にフランス人がつけた名前。「ウェンダット」の方は彼ら自身の呼び名である。言ってみれば「ジパング・ニホン国」のような案配だ。

本来は先住民自身の呼び名「ウェンダット」を使うべきなのだろうが、ここでは「ヒューロン湖」という地名でもおなじみの「ヒューロン族」を採用する。

ワンダケに入って先ず目に入るのは教会だ。後に述べるようにこの集落の成り立ちには教会が深くかかわっているのである。教会の前の通りには、レストランやギフトショップが並ぶ。ワンダケの目抜き通りだ。先住民の集落といっても、建物も人々の服装も他のカナダの町と変わるところはない。21世紀の日本の町で、かやぶき屋根やちょんまげ頭を見かけないのと同じことだ。

ワンダケの歴史村

もっとも、日本に「江戸村」や「明治村」があるように、ワンダケにもかつてのヒューロン族の暮らしぶりを再現した施設がある。「ヒューロン・トラディショナル・サイト(Huron Traditional Site)」だ。ヒューロン族の伝統的な家屋「ロングハウス」が再現され、昔のヒューロン族の服装をしたガイドが案内してくれる。

ヒューロン・トラディショナル・サイト

コスプレのガイドが説明

ロングハウスは幅6～7m、奥行き数十mのカマボコ型の建物で、前後の壁に出入り口が開いている。屋内には出入り口をつなぐ廊下があり、5mほどの間隔で炉が設けられている。

一つの炉を向かい合う二家族が共同で使った。平均的なロングハウスでは、炉は3～4箇所設けられていたから、一棟に6～8家族、30～40人ほどが住んでいたことになる。

こうしたロングハウスが数十軒集まって村を形作っていた。

ロングハウス

ロングハウスの内部

集落のジオラマ

ヒューロン族は、ロングハウスに定住して畑を耕す農耕民族だった。特に、トウモロコシ、豆、カボチャは重要な作物で、「三姉妹」と呼ばれた。

カナダの先住民と言うと狩猟民族と思われがちだが、実際には、カナダ南東部の先住民族は大きく二つのグループに分けられる。

一つは、ヒューロン族のようにロングハウスに定住し農耕を営んだ人たち。「イロコイアン」と呼ばれ、ヒューロン族の他、イロコイ族やエリー族などが含まれる。

もう一つは、ロングハウスよりもずっと簡易な作りの「ウィグアム」に住み、大自然の恵みを追って移動の多い暮らしを送っていた人たちだ。彼らは「アルゴンキアン」と呼ばれ、アルゴンキン族、オジブワ族、クリー族、ミクマック族などがこれに属する。

ミクマック族の集落。「ウィグアム」に住んでいた

ヒューロン・トラディショナル・サイトのレストラン「ネクワリ(Nek8arre)」では三姉妹を使ったヒューロン族の伝統料理を味わうことができる。

レストラン「ネクワリ」

悲劇の歴史

17世紀始め、探検家サミュエル・ド・シャンプランを筆頭にフランス人がカナダにやってきて、毛皮交易やキリスト教の布教を始めた。そのとき、ヒューロン族は力強いパートナーとなった。

彼らは当時のカナダで最も大きな民族集団で、シャンプランの探検に手を貸し、また、毛皮交易の大切な取引相手となった。少人数で移動を繰り返すアルゴンキアンと異なり、ヒューロン族は大勢の人たちが集まって定住していたので、交易や布教の拠点になりえたのだ。

そんなヒューロン族がワンダケに住み始めたのは17世紀末からだった。背景には、悲しい物語がある。

17世紀中ごろまで、彼らはヒューロン湖の右肩にあるジョージア湾南岸付近に住んでいた。ケベックシティから700kmほど西、トロントからは100kmほど北の、ミッドランド市の周辺だ。その一帯は「ヒューロニア」と呼ばれる。

ヒューロニアは東西55km、南北30kmほど。農業に適した地域で、およそ2万人のヒューロン族が20か所ほどの村々に分かれて暮らしていた。

ヒューロニアの位置

そこへフランス人がやってきて、毛皮交易が始まった。ビーバーなど野生動物の毛皮をヨーロッパの工業製品と交換するのだ。

ヒューロン族は、自分たちで毛皮獣を捕るだけでなく、カヌーに乗って周囲のアルゴンキアンを訪ね廻って毛皮を集め、それをフランス人に転売する「中継交易」を手広く行った。

一方、ヒューロン族の村はイエズス会がカトリックを布教するための拠点ともなった。

ミッドランドにはヒューロン族と宣教師の出会いを描いた大きな壁画があり、当時を偲ばせてくれる。宣教師はヒューロン族の村に住みこんで布教に励んだ。

ミッドランドの巨大な壁画

フランス人との出会いは、ヒューロン族の社会を大きく変えた。それまで石器や土器しかなかった彼らにとって、金属の鍋やナイフ、鉄砲、毛布など、ヨーロッパの製品はとても便利で、生活を豊かにしてくれた。やがて、そうしたヨーロッパ製の交易品なしでは生活できなくなっていく。

また、フランス人から天然痘をうつされた。先住民には免疫がなかったため被害は甚大で、1635年からの5年間で人口が2分の1に激減した。密閉したロングハウスに大勢が集まり暮らす「三密」そのものの生活環境が、伝染病の蔓延を助長したのだ。疫病で弱体化したヒューロン族を、イロコイ族が悩ませた。

イロコイ族はヒューロン族の南に住む強力な部族。17世紀には彼らも毛皮交易を通してヨーロッパ製品に依存するようになっていた。製品を入手するには、毛皮、特にビーバーの毛皮が必要だが、自分たちの領内のビーバーはほどなく獲り尽くしてしまう。そこで、北の諸部族から毛皮を手に入れようとした。その行く手を阻んだのがヒューロン族だった。

ヒューロン族と敵対したイロコイ族

イロコイ族はしばしばヒューロン族の村に侵入し、毛皮を奪ったり、女性をかどわかしたりしていたが、ついに1649年3月、1千人の大部隊で突如ヒューロニアを襲った。イロコイ族の奇襲を受けてヒューロニアは瓦解する。

襲撃から逃れたヒューロン族の一部は、ジョージア湾に浮かぶクリスチャン島に避難した。その数およそ1千人。多くはキリスト教徒だった。

島は食べ物が乏しく餓死者が続出。1650年春には300人ほどにまで減っていた。生存者は宣教師に励まされて現在のケベック旧市街付近にまで逃げてきた。

その後およそ半世紀に渡って付近をあちらこちらと漂泊したが、1697年、ついに現ケベック旧市街の北13kmにあるジュンヌ・ロレット(June Lorette)伝道所の近くに落ち着いた。それがワンダケの発祥である。

ワンダケの土壌は砂質で、作物はよく育たない。そこで、必需品である工業製品を得るため、モカシン靴やスノーシューの製造と販売を始めた。ちなみに、モカシンもスノーシューも北米先住民の発明だ。やがて、モカシンとスノーシューの製造はワンダケの主要産業となる。

ワンダケでのスノーシュー作り（20世紀初め頃）

現代に活きる歴史と伝統

一見、ほかのカナダの集落と変わらない、現代のワンダケ。しかし、目を凝らせば、ヒューロン族の歴史と伝統が見えてくる。

集落の入り口にあるノートルダム・ロレット教会(Notre-Dame-de-Lorette Church)は、カナダの国定史跡で、旅行客にも開放されている。最初は1730年に建てられた。現在の建物は、1865年に再建されたもの。

ノートルダム・ロレット教会

教会の内部には、先住民の国ならではの特徴がいろいろ見られる。祭壇には、毛皮、スノーシュー、太鼓、カヌーの模型などヒューロンの伝統を象徴するものが置かれている。

聖カテリ・テカクウィタ(Kateri Tekakwitha：1656年-1680年)の像もある。北米先住民として初めて聖人に列せられたイロコイ族の女性だ。

キリストの生誕を、「ロングハウスにキリストが生まれ、東西南北のチーフが来て、キツネとビーバーの毛皮を贈り物として捧げた」という物語として表現したジオラマもある。

祭壇

聖カテリ・テカクウィタ像

キリストの生誕・ワンダケ版

歴史と伝統は、ワンダケの産業にも受け継がれている。ワンダケはケベックの都心に近いので市内の会社に勤める人も多いが、一方、独特の地場産業も繁盛しているのだ。スノーシューとモカシンの製造会社である。

GVスノーシューズ社は、木枠にガットを張った伝統的なものから最先端のアルミやカーボン製まで、各種のスノーシューを作っている。世界で一年に市販されるスノーシュー50～60万足の1割に当たる5～6万足を製造し、カナダ国内はもとより、日本を含め15の国々に輸出しているという。

組み立て作業場

伝統的なタイプも製造

ワンダケにはモカシン靴の工場もある。バスティン産業(Bastien Industries)は、現代風にアレンジしたモカシンを製造。「ハイアワサ(HIAWATHA)」のブランド名で販売し、日本にも輸出している(“bastien モカシン”をキーワードに検索すると通販サイトがヒットする)。

パスティン産業

モカシン作り

日本にも輸出

いかにも現代的な事業もある。宿泊施設「オテル・ミュゼ・プルミエ・ナシオン(Hôtel-Musée Premières Nations)」だ。英語ではファースト・ネーションズ・ホテル-ミュージアム(First Nations Hotel-Museum)になる。開業は2008年。

客室はリゾートホテルのように居心地がいい。館内のレストラン「ラトレイト(La Traite)」では現代風にアレンジした先住民料理を味わうことができる。

オテル・ミュゼ・プルミエ・ナシオン

外の風景を楽しめるロビー

レストラン「ラトレイト」

この施設には、名前の通り、博物館が併設されている。ホテルの建物はロングハウスを、そして博物館は燻製小屋をモチーフにしたという。後者には「記憶と知識を保存する」という意味合いがあるそうだ。

館内には、ヒューロン族の文化と歴史やワンダケの地場産業が紹介されている。

博物館内

さらに、博物館の隣には、かつてのヒューロン族の村と同じような丸太作りの防御壁の中に、ロングハウスが建てられている。ここでは、語り部の物語に耳を傾けるプログラムや、ロングハウスで一夜を過ごすプログラムなども用意されている。

ホテルや伝統産業の事業が成功しているのは、ワンダケが都心に近いことが大きい。スノーシューやモカシンを出荷するにも、宿泊客を集めるにも、非常に有利な条件なのだ。

また、住民は古くからケベックの町の人たちと取り引きしてきたので、企業の経営にも慣れていた。さらに、都市に近いため教育の機会にも恵まれている。

一方、ヨーロッパ人、特にフランス系の人たちと長年交流してきたため、人種的な混交も進んだ。ヨーロッパ系カナダ人と見分けのつきにくい住民も多い。

しかし、そうした外見にかかわらず、彼らは周囲から「ヒューロン族」と見なされてきたし、彼ら自身も「ウェンダット」を自認してきた。ワンダケでは、いま、子どもたちにウェンダットとしての自覚と誇りを育む教育が施されている。

ロングハウスの中で火の起こし方を見学する子供たち

キャビール・クーバ滝

ワンダケに行ったら是非訪ねたいのが「キャビール・クーバ崖と滝公園(The Park of the Kabir Kouba Cliff and Waterfall)」。清冽な水音のシャワーにしばし包まれると、心が洗い清められるような心地がしてくる。

滝の下流は岩肌を削って流れるサンシャルル川。都心から車でわずか15分ほどの所とは信じられない光景だ。

キャビール・クーバの滝

サンシャルル川

どう読む？ヒューロン語の「8」

ワンダケでは時折ヒューロン語に出会うが、そのヒューロン語の表記の中で、アルファベットにいきなり数字の「8」が混じって面食らうことがある。例えば、ヒューロン・トラディショナル・サイトは“Onhoüa Chetek8e”とも呼ばれる。そしてこの施設のレストランは“Nek8arre”だ。他にも、ビーバーをヒューロン語で"Ts8taye"と書き表すなど、「8」が頻出する。

ヒューロン語を書きとめた宣教師が「ウ」を手書きで「OU」と書いていたものが、「O」の上に「U」が乗っかり、「U」の口が閉じて「8」になったのだという。子音の前の「8」は“ou”と同じ読み、母音の前では“what”や“where”の“wh”と同じ読みになる。

Onhoüa Chetek8e はオヌア・チェテクウェ。Nek8arre はニクワリ。Ts8taye はツータイと読む。

アルバータの先住民

三角形のテントに住み、馬に跨ってバッファロー（野牛）を追う……西部劇が世界に広めた「インディアン」のイメージだが、カナダにもそんな暮らしを送っていた先住民がいる。大平原のファースト・ネーションズだ。

カナダ西部、ロッキーのふもとに広がる大平原には、ユネスコの世界遺産に登録された先住民の史跡が二カ所ある。どちらも、バッファローと大地を分けあってきた人々の暮らしを今に伝えている。

また、運営には地元のファースト・ネーション、ブラック・フットの人たちが全面的に関わっている。

ヘッド・スマッシュト・イン・バッファロー・ジャンプ
～大がかりなバッファロー狩りの現場～

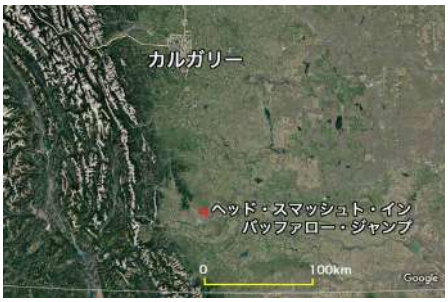
世界遺産の一つ、ヘッド・スマッシュト・イン・バッファロー・ジャンプ(Head-Smashed-In Buffalo Jump)は、アルバータ州の大都市カルガリーから南へ170km。平らな大地がストンと落ちた、高さ約10m、幅300mほどの断崖だ。

「バッファロー・ジャンプ」とは、バッファロー（アメリカ野牛）を崖からジャンプさせて崖下へ墜落させる、先住民の猟法。

北アメリカの大平原には、バッファロー・ジャンプに使われた崖が何百カ所もある。その中でヘッド・スマッシュト・インは、使われ始めた時代が5800年もの昔に遡り、その後1850年代に至るまで使われてきた。崖の下には、長年にわたって蓄積された膨大な量のバッファローの骨が今も埋もれている。ここほど古くから繰り返し使われ、規模が大きく、しかも周囲が開発されずに太古の景観が残るバッファロー・ジャンプは、他にはない。

バッファロー・ジャンプを成功させるには、バッファローの生態を熟知し、周辺の地理・環境も知りつくした上で、多くの仲間が力を合わせて取り組まなければならない。

ヘッド・スマッシュト・インは、このような、かつて北アメリカの大平原に存在した狩猟文化の現場を物語る貴重な景観として、1981年に世界文化遺産に登録されたのである。



野生のバッファロー

バッファローは北アメリカ大陸最大の野生動物。平均的なオスの体重は800kgに及ぶ。ところで、本来「バッファロー」は東南アジアやアフリカに住む「水牛」を指す。だからアメリカの野牛を「バッファロー」と呼ぶのは誤りで、正しい名前は「バイソン」だ。カナダでもアメリカでも「バッファロー」という俗称が親しまれてきたが、近年では正式名称の「バイソン」を使うことが多い。そこで、以下は原則として「バイソン」を使う。

バイソンは、年長のメスを中心にした群れをつくる。春から秋にかけては、いくつかの

群れが集まって大きな群れをなす。バイソンは、驚くと、群れ全体が大暴走を起こす性質がある。そうした大暴走を「スタンピード」と呼ぶ。

バイソン。右はオス。メス（左）はオスより小さい

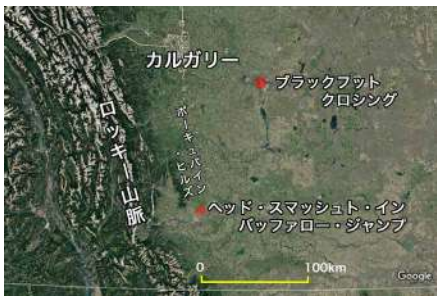
メスと子供の群れ

驚くと大暴走（スタンピード）を起こす

バッファロー・ジャンプは、バイソンの群れを巧みに崖の方へと誘導し、最後には崖っぷちに向かってスタンピードを起こさせる猟法だ。

バイソンをジャンプさせる

広大な大平原の中で、バイソンが特に多く生息する地域があった。ロッキー山脈の東にポーキュパイン・ヒルズと呼ばれる丘陵地帯が南北100kmにわたって連なっている。ロッキー山脈とポーキュパイン・ヒルズに挟まれた、オルセン・クリーク流域は、バイソンにとって、食べ物の草と飲み水が豊富な理想的な環境だった。ヘッド・スマッシュト・インは、その南の端に位置している。



バイソンの群れは、季節によって住みかを変えた。春は、ヘッド・スマッシュト・インから150kmほど北西のブラックフット・クロシング周辺で子を産む。その後、ポーキュパイン・ヒルズのふもと伝いに南下し、秋を迎える頃にはヘッド・スマッシュト・インに近い地域にやってくるのだ。この頃、メスは一年中で最も脂が乗っている。いわば「旬」である。

このバイソンの群れの一部を切り取って崖へと誘導するのだが、それには、周到な準備と作戦が必要だ。まず、バイソンの角にコケを詰めて、火をつけて煙を出す。煙の臭いを嗅いだバイソンは、野火かと思い、移動を始める。こうやって、100～200頭のバイソンを切り取り、崖の方に向かって移動させる。

勢子がオオカミの皮を被って子牛に近づくという手もつかう。バイソンは、鼻は利くが視力は弱いので、本物のオオカミだと思い、子牛を守ろうと子牛の近くに寄ってくる。だから、子牛を上手く崖の方向に追っていくと、群れ全体を誘導できるのだ。

バイソン母子

秋がバッファロー・ジャンプの季節

さらに、バイソンの皮を被った人が群れの先頭を走り、群れを導く。バイソンたちは彼を仲間の牛だと思って後を追う。バイソンは速く走れるので、これはかなり危険な仕事だ。このように、あの手この手を使い、何日もかけてバイソンを崖の方に誘うのである。崖の近くには、バイソンを誘導するため、あらかじめ積み石を5mくらいの間隔で並べておいた。積み石は、手頃な岩を5～10個ほど積んだもので、崖の特定の場所へ向けて、先すぼみになるよう、ハの字型に配置。その長さは8kmに及ぶこともあった。

積み石には、陰に勢子が隠れているものもあった。バイソンの群れが、いよいよ誘導コースの中に入ると、大きな皮などを振ってバイソンを驚かせ、大暴走させるのだ。

グレンボウ博物館（カルガリー）の展示

カナダ歴史博物館（オタワ）展示のジオラマ

こうして、バイソンは、崖っぷち向かってまっしぐら。そこが崖だと気づいたときにはもう遅い。引き返そうにも、後ろから押し寄せる仲間に押されて、引き返せないのだ。

一網打尽にしたバイソンは、近くの広場で解体し、処理する。付近には豊富な水が湧く泉があって、処理に不可欠な水を得ることができる。処理に適した広場と水場があることも、ここがバッファロー・ジャンプに使われてきた理由のひとつだ。

崖の下には広場と水がある

解体したバイソンは、その場で食べるほか、干し肉にして保存した。間近に迫った冬を余裕で乗り切れるか、それとも飢えに苦しむかは、バッファロー・ジャンプの猟果次第だった。

名前の由来

ヘッド・スマッシュト・イン(「頭かち割り」)とは、バイソンの頭を割ったからついた名前ではない。名の由来についての言い伝えがある。昔、バッファロー・ジャンプの際に、一人の少年が崖の岩棚の下に身を寄せ、頭上からバイソンが次々に飛び落ちていく様子を面白がって見ていた。ところが、この日は想定外の豊猟。バイソンの遺骸がどんどん積みあがり、ついに少年は遺骸と壁に挟まれて身動きが取れなくなる。猟の後、獲物の解体にやってきた人たちは、遺骸に押しつぶされ頭が砕けた少年の遺体を見つけたのだった……。

ところで、ここの崖は6000年前には高さが20mほどあった。その後、バイソンの骨が積もりに積もって、現在の10mの高さになったという。もちろん堆積物は骨だけではない。大半は水や風に削られ流されてきた土砂だ。

それにしても、一度に100頭以上も捕殺して、地域のバイソンが減らないのだろうか?

実際には、ヘッド・スマッシュト・インでのバッファロー・ジャンプはそうたびたび行ったのではないようだ。案内センターの説明パネルによると、バッファロー・ジャンプは様々な好条件が重なったときに限って実施された。ヘッド・スマッシュト・インが数十年間一度も使われないこともあったらしい。

案内センター

ヘッド・スマッシュト・インの案内センター(The Interpretive Centre)は、1987年開館。建物は、周囲の景観を損ねないよう、断崖に隣接した丘をくり抜いて作られている。

館内には、ヘッド・スマッシュト・インの6000年近くに及ぶ考古学や、地元ブラックフット族の文化と歴史を紹介する展示が並ぶ。

かつてブラックフット族はバイソンの肉を主食にし、バイソンの皮で作った「ティーピー」と呼ばれるテントに住んだ。暮らしに必要な道具も、バイソンの骨や角、内臓などを巧みに使っていた。そんなブラックフット族の暮らしや、西洋系カナダ人との交流による暮らしの変化が、実物によって分かりやすく展示されている。

ミニ劇場ではバッファロー・ジャンプの様子を再現した15分の劇映画を上映している。また、カフェではバッファロー・シチューやバッファロー・バーガーを食べることもできる。

丘を掘って建設した案内センター

案内センター入り口

バイソンの様々な利用法も展示している

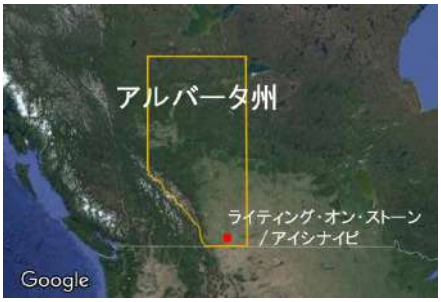
剥製を使ったバッファロー・ジャンプのジオラマ

バイソンの皮で作ったテント(ティーピー)

バッファロー・シチュー

ライティング・オン・ストーン／アイシナイピ
今に伝わる霊場

もうひとつの世界遺産、ライティング・オン・ストーン／アイシナイピ(Writing-on-Stone / Áísínai'pi)は、アルバータ州最南部、アメリカとの国境まで8kmの地点にある。



「ライティング・オン・ストーン」、「石に書く」という名の通り、石や岩にいろいろな絵が描かれたり、あるいは彫りつけられたりしている。その数は1000点以上にも及ぶ。

なお、岩に描かれた絵を「岩絵(petrograph)」、彫りこまれた絵を「岩刻画(petroglyph)」、両者を合わせてロック・アートと呼ぶことにする。

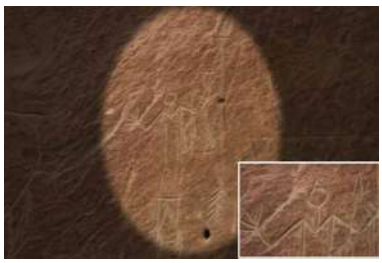
「アイシナイピ」とは地元のファースト・ネーション、ブラックフット族の言葉で「描かれた」とか「書かれた」という意味。絵の作者は、主にブラックフット族の人たちだったのだ。

ブラックフット族は、シクシカ族、カイナイ族、ピカニー族の3部族からなっている。カナダ大平原を代表するファースト・ネーションだ。アイシナイピのある辺りは、3部族のうち一番南に住むピカニー族の勢力範囲。ピカニー族は、アルバータ州南部から合衆国モンタナ州北部にかけて住む人たちである。アイシナイピのロック・アートには先住民の暮らしと信仰が刻まれていると考えられている。

意味の分からないものも多いが、比較的わかりやすいものをいくつか見てみよう。

頭部が欠けているが、明らかにバイソンを描いたもので、バイソンに関連するなんらかの儀式の際に彫り付けたと考えられる。大平原の先住民にとって、バイソンは衣・食・住の全てをまかなう、生活の要だった。

大きな円は盾を表し、盾を構えた戦士を描いている戦いに先立って、精霊の加護を求めて彫りつけたと考えられる。こうした盾もバイソンの革で作った。この辺りはバイソンも多い豊かな地域だったが、それだけに、周辺の部族が侵入し、戦いが絶えなかった。そうした戦いの記録も絵にして彫り付けた。



槍を携えた戦士。頭の上の三角は髪を結ったもので、戦の指導者を描いたものと考えられている。

精霊の加護によって他部族からの「馬泥棒」がうまくいったことを感謝するために描いた絵。敵部族の集落に忍び込んで馬を盗み出すことは、大きな手柄とされた。なお、馬はもともとアメリカ大陸にはおらず、ブラックフット族が馬を初めて手に入れたのは1730年頃だった。

岩絵は鉄鉱石の粉を獣脂に溶いて描いた。長年日光と風雨にさらされ色褪せているが、画像処理するとくっきりと見える。

ロック・アートの見学にはガイドの付き添いが必要

地元のピカニー族だけでなく、シクシカ族やカイナイ族の人たちもここを訪ね、絵を描いたり彫ったりしている。そればかりか、クリー族やアシニボイン族、クロー族など他の部族の人が描いたり彫ったりした絵もあるという。

遠くからわざわざここまで足を運んだのは、この辺りには数多くの精霊が住み、霊的な世界と交流できる場所とされてきたから。いわば強力な「パワースポット」、霊場なのだ。

ここの岩刻画や岩絵には、そうした精霊に助けを求めるためのものや、精霊に助けられたことを記録するためのものが多い。

精霊が描いたとされる絵もある。精霊は絵によって人々にお告げを与え、バイソン群のいる場所を教えたり、敵の接近を告げたり、助言を求める人に応えたりしたと信じられてきた。

アイシナイピは、ミルク川のほとりにあり、付近には「フードゥー」と呼ばれるキノコのような地形が林立するスポットもある。ブラックフットの人々は、霊的な力は大地に宿ると信じ、アイシナイピ一帯の特異な景観を神聖視してきた。その信仰に基づき、今も様々な宗教儀礼をこの地で催している。

伝統的な宗教儀礼の一つが、ビジョン・クエスト（霊夢探求）だ。若者が人里離れた場所に独りで籠り、食を絶って、ひたすら精霊の助力を求めるというもので、やがて彼を憐れんだ精霊が、多くは動物の姿で現われ、若者の守護霊になると信じられてきた。アイシナイピには、ビジョン・クエストのために籠る場所として、現代のファースト・ネーションの人々に人気のスポットもある。

アイシナイピは、ミルク川のほとりにある

フードゥー群

崖の途中のテーブル状地形はビジョン・クエストに利用される

ここの価値は、過去に制作された岩絵や岩刻画が数多く残るだけではない。それらロック・アートと、ここの独特の景観は、ブラックフットの人たちが何百年もの間受け継いできた、そして今なお受け継がれている信仰を、目に見える形で伝えている。2019年に世界遺産に登録されたのは、そういう文化的な価値が評価されたのである。

ビジターセンターではブラックフット族の文化やライティング・オン・ストーンの価値について学ぶことができる。

アイシナイピのロックアートの中で一番古いものはいつ頃の制作か、定かではない。恐らく4500年前～3500年前に始まったようだ。

もっとも、大半は、西暦1000年頃以降、19世紀半ばころまでの間に彫られたり描かれたりしたと考えられている。

中には、先住民以外の人が彫り付けたと思しき落書きのようなものもある。

例えば、これは1931年にブルースなる人物が記念に彫ったものだろう。ここがアルバータ州の州立公園として保護されるようになったのは1957年から。それ以前のものは、たとえ落書きでも「歴史的碑文」として残されているのだ。

しかし、1957年に州立公園になってからはここの岩壁を損なう行為は違法となり、従ってそれ以降に彫ったものは、岩の表面を削って消している。

自動車を描いた岩刻画もある。これは、ヨーロッパ系の入植者が彫ったものと思われたが、一方、その描き方から、先住民の作品である可能性も考えられていた。1990年代になって、この問題に決着がついた。

岩刻画を彫っている最中の写真がみつかり、彫ったのはモンタナ州に住むブラックフット族のバード・ラトルという人物であることが判明したのだ。そして、同行者ローランド・ウィルカムの日記から、1924年9月、バード・ラトルがウィルカムの車でアイシナイピを訪ねた際の出来事であることがわかった。

バード・ラトルはアイシナイピ近くに生まれたが、故郷を離れ、合衆国モンタナ州のブラックフット族居留地に暮らしていた。彼は、故郷に帰った旅行の記録を岩に彫り付けたのである。

従って、この絵は、「人生の記録として岩刻画を彫る」というブラックフット族の伝統に則ったものだと言えるのだ。

トーテムポールの民を巡る旅

誰もが知っているトーテムポール。カナダ西海岸の自然の豊かさと、先住民の世界観が生んだ、世界にも他に例を見ないアートだ。トーテムポールの民を巡る旅。それは、ユニークな文化を肌で感じ、大自然に分け入って、彼らと大地を分かち合ってきたクマやクジラなど野生の大物に出会い、カナダならではの「食」やショッピングも満喫する、エキサイティングな体験の連続なのだ。

ここでは、一例として、世界都市バンクーバーを起点に、州都ビクトリアを経てキャンベルリバーへ、先住民の案内でヒグマに会いに行くまでの旅を提案する。

©Destination Vancouver

バンクーバー
～世界都市にファースト・ネーションズの文化が息づく～

旅の出発はバンクーバー。周辺も含めて250万人近くが暮らす、ブリティッシュ・コロンビア州（以下BC州）最大の町だ。国際空港に到着した旅行客をトーテムポールなどの先住民アートが出迎える。

「歓迎像」スーザン・ポイント（マスクイム族）1996年

「歓迎像」ジョー・デビッド（ヌーチャヌルス族）1986年

BC州に特有で、しかも見栄えのするBC州ファースト・ネーションズの美術作品は、

「サンダーバードとシャチ」リチャード・ハント（クワクワカワクゥ族）1999年

ここがBC州の（そしてカナダの）「玄関」であることをビジュアルに訴える「巨大な表札」だ。

同時に、旅行者への「歓迎の気持ち」を伝えるオブジェでもある。

もともとトーテムポールには、家の入口にいわば表札代りとして立てたものや、客人を迎えるためのものもあったから、空港での先住民アートの展示はトーテムポールの伝統に則ったものとも言えるだろう。もっともトーテムポールは「表札代わり」や「客の歓迎」以外にも様々な目的で立てた。

また、同じBC州のトーテムポールでも地域によって様式の違いがある。そのようなトーテムポールの多様性が一望できるのが、スタンレーパークだ。

トーテムポール図鑑 !?
スタンレーパーク

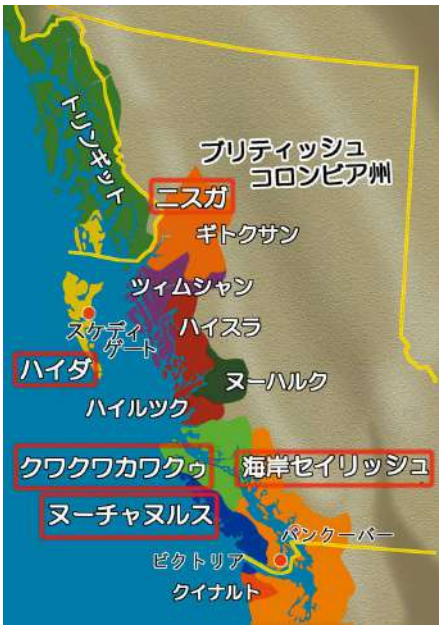
ダウンタウンから歩ける距離にあるスタンレーパーク（Stanley Park）。市民にも観光客にも大人気で、訪れる人は年間800万人に達する。

この公園のブロックトンポイント（Brockton Point）と呼ばれる区域に、トーテムポールが立ち並ぶ一角があり、年に350万人が立ち寄るという。観光客たちはトーテムポールを背に記念写真を撮ると去っていく。

けれども、ただ記念写真を撮るだけではもったいない。ここは、カナダ西海岸各地の様々な目的で作られたポールが、まるで図鑑のように並ぶ、願ってもない場所なのだ。

トーテムポールは過去の遺物ではない。一度はすっかり廃れようとしたが、20世紀後半に奇跡的な復興を遂げたのである。さらに、近年、新たな潮流も生まれている。

ブロックトンポイントには、そんな西海岸ファースト・ネーションズの歩みを物語るトーテムポールが並んでいるのだ。



西海岸のファースト・ネーションズ。赤枠はブロックトンポイントにトーテムポールあり

空中墓 チーフ・スケダンズのポール（ハイダ族）

先ずは、向かって右のポールから。ハイダ・グワイの島々（旧称クイーンシャーロット諸島）に住むハイダ族のトーテムポールだ。元はスケディゲート集落に立っていたが、1936年に買い取られ、スタンレーパークに移設された。しかし、雨風による傷みが激しくなり、また、付近に道路を通すことになったため、1962年に処分された。現在立っているのは複製だ。

このポールは、スケダンズというチーフの死を悼んで立てられた。オリジナルのポールではてっぺんの四角い板の後がくり抜かれ、スケダンズの遺骸が収められていた。つまり、このポールは、スケダンズのお墓だったのだ。

スケディゲート村（1878年）。左端に「チーフ・スケダンズのポール」が見える

上の写真のアップ

他のファースト・ネーションにも故人を悼み顕彰するポールがあるが、トーテムポールが墓を兼ねているのはハイダ族で発達した風習だった。

四角い板の中央、赤く塗った円い部分は、スケダンズの家紋である月を表してる。その中の顔は、タカだとも伝説の巨鳥サンダーバードだとも言われている。いずれにしても鳥なので、顔の両側に翼と足が描かれている。

その下はシロイワヤギ。名前の通り「岩山に住む白いヤギ」だ。この彫刻では、短刀のような角と四肢の蹄がシロイワヤギの特徴を表している（角は風化により片方が欠けている）。

よく見ると、歯並びの表現はヤギよりも人間に近い。実は、ここに彫られているのは、シロイワヤギであると同時に人間なのだ。これは、北アメリカの先住民に広く見られる世界観を表している。動物と人間の境はあいまいで、動物が人間に変身したり、人間が動物に化身したりするのである。

それぞれの動物、例えばシロイワヤギにはシロイワヤギの社会があって、そこでは彼らは人間の姿をしている。いわば「シロイワヤギ人間」だ。そのシロイワヤギ人間が、人前に出るときにはシロイワヤギの皮を被ってシロイワヤギに変身するのである。

ポールの一番下はグリズリー。日本ではハイイログマとも呼ばれる。北海道のヒグマと同じ種類のクマである。眉・目・鼻・口の表現はシロイワヤギと変わらない。ただ、足が太く、前足の爪が長いことから、ヒグマだとわかる。クマが抱えているのはアザラシか、もしくは小さなクジラだと考えられている。

トーテムポールには部族ごとに一定の様式がある。ハイダ族のポールはもともとあまりカラフルではないのだが、このポールは、防雨対策のためか、本来白木であるはずの木地を茶色く塗っている。

太い眉と大きな目も、ハイダ族のポールの特徴だ。この復刻ポールは、後に人間国宝級のアーティストになるビル・リード（1920-1998）が彫った。彼は当時42歳だったが、こうしたトーテムポールを彫る実践を通してアーティストとして成長していったのである。

表札兼広告塔 ワカスポール（クワクワカワクゥ族）

トーテムポールには家屋に密接して立つものもある。そうしたポールには、一家の起源にかかわる物語や、氏族（クラン）を示す動物などが彫りこまれ、その一家が、いかに由緒正しい名門であるかを誇示している。いわば「表札兼広告塔」なのだ。

スタンレーパークの右から5番目のポールは、クワクワカワクゥ族のチーフの家に立っていたポールの複製で、チーフの名前から「ワカスポール」と呼ばれる。クワクワカワクゥ族はバンクーバー島北東部と、その対岸の本土側一帯に住む人たちだ。オリジナルは1895年頃、クワクワカワクゥ族が多く住むアラートベイに立てられていた。

一番下に、ワタリガラスの顔が彫られている。オリジナルのポールでは下嘴が開いて、家に入れる仕組みになっていた。

オリジナルのポール

また、オリジナルでは、壁に翼、尾羽、足が描き込まれ、ポールが表す頭部と壁とが一体となってワタリガラス全体を表現していた。なお、復刻版のポールは1987年、ワカスの甥の息子にあたるダグ・クランマーが彫った。ワカスポールにはクワクワカワクゥ族のポールの特徴がいくつか見られる。

第一の特徴は、多くの場合、一番上にサンダーバードもしくはワシが彫られていること。このポールも一番上はサンダーバードだ。サンダーバードはワシに似た怪鳥で、とてつもなく大きい。

このポールに表現されているのは、サンダーバードがシャチを海から引き揚げる姿。シャチは重さが6トンにも達するのだから、サンダーバードの巨大さが想像できる。サンダーバードが現われると、大雨や嵐になると考えられた。雷鳴はこの鳥が翼を打ち合わせる音。そして稲光はこの鳥が目から発する光だとされたのだ。

クワクワカワクゥ族のポールの特徴、その2は、本体に付け足された部分があるものが多いこと。このポールの中ほどに怪鳥「フーフーク」が彫られている。長い嘴で人間の頭骨を割り、目玉をついばむ人食い鳥だが、その嘴はメインのポールにくっつけたものである。

この他、シャチの尾びれと、先に見た一番下のワタリガラスの嘴が付け足されている。サンダーバードの翼も付け足しだ。付け足しによってポールはとても派手な印象になる。これは、他の部族にはあまり見られない手法である。

クワクワカワクゥ族のポールの特徴その3は、色づかいも派手なこと。ポール全体に、白・赤・緑・黄色・茶色・黒などの彩色が施されている。

特徴その4。動物や人物像には、金壺眼（かなつぼまなこ）を見開いて正面を見据えた、恐ろしげな印象を与えるものが多いこと。目は、通例、青や緑で縁取られている。たとえば、同じクマでも、ハイダ族のチーフ・スケダンズのポールでは柔和な印象なのに対し、ワカスポールの下から二番目に彫られたクマ（上の写真）ではかなり恐い感じだ。

スタンレーパークの横並び8本のトーテムポールのうち5本がクワクワカワクゥ族のポールだ。全て一番上はサンダーバードかワシで、うち4本は翼を広げた姿である。お土産物などのミニチュアポールには、てっぺんに翼を広げた鳥を配したものが多い。クワクワカワクゥ族のポールは、多くの人がイメージする、いわば「最も典型的なトーテムポール」なのだ。

家屋の支柱 サンダーバード・ハウスポスト（クワクワカワクゥ族）

右から3番目のサンダーバード・ハウスポストもクワクワカワクゥ族のポールだ。高さは3m。8本の中で最も低い。このポールは、家の柱（ハウスポストhouse post）と呼ばれる通り、家屋の柱として使うためのものだ。ハウスポスト型ポールは、2柱が一対となり、頭のてっぺんに梁（はり）を載せて支えた。彫刻は、家の内側に面する部分に施された。

初期のトーテムポールは、独立して立っているのではなく、このポールのように家屋の一部分をなし、彫刻は室内に施されていたと考えられている。

1778年、イギリス人ジェームズ・クックの探検隊が、ヨーロッパ人としては初めて現在のBC州沿岸に足を踏み入れ、先住民の家に招かれた。その時、探検に参加した画家のジョン・ウェバーが、家の中の柱に施された彫刻に目を見張り、絵に描いている(上図)。

もし、家の外に大きなポールが立っていたら、とても目立つので、探検隊の記録に残っているはずだが、そのようなポールの存在を示す記述や絵はない。

アメリカ大陸の先住民はヨーロッパ人が来るまで鉄器を知らなかった。大きなトーテムポールが盛んに彫られるようになったのは、白人との交易により鉄器が大量に出回るようになってからで、それまでは、このサンダーバード・ハウスポストのような屋内の装飾だった。「サンダーバード・ハウスポスト」は、いわばトーテムポールの原点に近い形なのだ。

オリジナルはチャーリー・ジェームズ(1867-1938)が20世紀初めに彫った。クワクワカワクゥ族をテーマとする映画のセット用に貸し出されたこともある(上の写真。屋内のシーンだが当時のカメラは暗いと写らないので屋外にセットした)。現在スタンレーパークに立つポールは、トニー・ハント(1942-2017)による複製だ。

文化の復興 エレン・ニールのポール(クワクワカワクゥ族)

カナダ政府は1876年に「インディアン法」を定めて先住民の同化を推し進め、先住民の文化を根絶やしにしようとした。伝統的な宗教や儀式を禁じ、子どもたちを親から引き離して寄宿舎学校に入れ、「白人」のような人間にしようと努めた。こうした、伝統文化を

抑圧する政策により、トーテムポールを彫る伝統は途絶えそうになった。けれども、遠隔地には、僅かながらトーテムポールの制作に携わる人たちがいて、細々と伝統を受け継いでいた。

20世紀中ごろになると、インディアン法が改正されたこともあって、トーテムポールの制作は劇的な復活を遂げる。

その立役者の一人が、このポールを彫ったエレン・ニール(1916-1966)だ。彼女はサンダーバード・ハウスポストを彫ったチャーリー・ジェームズの孫娘。祖父から学んだ技術でミニチュアポールを彫り、スタンレーパークで売って生計を立てていたが、やがて博物館などの発注を受けてトーテムポールの制作に取り組むようになったのである。

なお、トーテムポールに限らず、20世紀後半にはカナダ先住民の様々な文化が復興し、カナダ先住民ルネッサンス(Canada's Indigenous renaissance)と呼ばれる。

人間は動物 ビーバー・クレスト・ポール(ニスガ族)

クワクワカワクゥ族の彩り豊かなポールとは対照的なのが、ニスガ族の「ビーバー・クレスト・ポール」だ。ニスガ族の伝統に則り、彩色は一切施されていない。ニスガ族は、BC州本土、アメリカのアラスカ州と境を接する、ナス川流域に住む。このポールには、作者ノーマン・テイト(1941-2016)の家系がビーバーを家紋とするに至った出来事が刻まれている。

彫られた像を見ると、頭の形は動物を想わせる。鱗の生えた杓文字(しゃもじ)のような尾からビーバーだとわかる。ところが、四肢は人間。いわばビーバー人間なのだ。ポールには多数のビーバー人間が彫られ、一番下には、ビーバーの皮を脱いで、人間の姿となったシーンが表されている。

ノーマン・テイトの祖先は、ビーバーたちが人間に化身する現場を目撃し、その出来事からビーバーを家紋にするようになったという。チーフ・スケダンズのポールに表されていた「動物の正体は人間だ」という考え方を、物語にして表しているところが、ビーバー・クレスト・ポールの特徴だ。

ところで、これまでに見たポールは19世紀から20世紀初めに彫られたポールを復刻したものだったが、このビーバー・クレスト・ポールは1986年のバンクーバー万博およびバンクーバー市制100周年を記念して新たに彫られたオリジナル作品だ。

この例のように、非先住民の依頼により彫られた比較的新しいポールにはストーリー性のあるものが目立つ。逆に古いポールには家紋そのものが彫りこまれていることが多い。トーテムポールの意匠にも、時代による移り変わりがあるのだ。

その他のトーテムポール

■ガアクスタラスのポール（クワクワカワクゥ族）

作者名ガアクスタラスは「朝食を食べる場所」の意味。クワキウトル都市協会の発注で制作したもので、1991年に完成。制作を手伝ったオジブワ族の人を顕彰するため、上部にオジブワ族など東部の先住民が使うカヌーが彫られている。一番下は伝説のキャラクター、山姥（やまんば）。

■スカイチーフのポール（ヌーチャヌルス族）

作者はアート・トンプソンとティム・ポール。ヌーチャヌルスは、バンクーバー島西部に住むファースト・ネーションである。二人はヌーチャヌルスの伝統が今も活きていることを表現しようとこのポールを彫った。1988年制作。家の前に立てた「表札」ポールを表している。

■オスカー・マルティピのポール（クワクワカワクゥ族）

作者オスカー・マルティピがリッチモンド（バンクーバー国際空港がある町）の従業員賃金委員会から発注されて、1968年に制作。後にスタンレーパークに寄贈された。

地元バンクーバー周辺のファーストネーションズのポール

以上の8本は全てBC州ファースト・ネーションズのポールだ。しかし、BC州の中でもこの公園があるバンクーバー市周辺について言えば、そこに住む海岸セイリッシュ*のポールは含まれていない。彼らにはトーテムポールを彫る伝統はなかった。だから、それもやむをえないのかもしれない。ところが、1980年代頃から新たな潮流が生まれ、バンクーバー市周辺の先住民彫像アートが花開いていく。【*セイリッシュ語族と呼ばれる言語グループの言葉を話す民族のうち、太平洋沿岸に住む人たちを、大雑把にまとめて海岸セイリッシュ（Coast Salish）と呼ぶ】

■イェルトンのポール

8本から少し離れて立つ1本のポール。海岸セイリッシュの一部族、スコーミッシュ族のロバート・イェルトン（1946-）が亡き母を追悼して彫ったものだ。立てられたのは2009年。このポールの一番下に彫られた女性像は、イェルトンの母親を表している。

イェルトンの母親は現在のスタンレーパークがある地域で1913年に生まれ、22歳頃までまさにこのポールが立っているブロックトンポイントの辺りに住んでいたという。

もともとトーテムポールを彫る伝統はなかった海岸セイリッシュだが、あらゆる伝統には、始まりがある。新しく始めて、伝統にすればよいという考え方もできよう。

■スーザン・ポイントの「歓迎の門」

一方、海岸セイリッシュには、トーテムポールこそなかったものの、室内の柱や祭具、墓標などに彫刻を施す伝統はあった。それなら、トーテムポールを真似るよりも、むしろ、伝統的な文化の特徴をいかした、新しい形の作品をこそ制作すべきだ、という考え方もなりたつ。

バンクーバー市の先住民マスクイム族のスーザン・ポイント(1952-)が制作し2008年にブロックトンポイントに設置された3つの門は、同部族の伝統的な家の柱に着想を得たもので、この地の先住民として来訪者を歓迎する気持ちを表している。スーザン・ポイントは、1980年代初め頃から海岸セイリッシュの美術や意匠を復活させる取り組みをつづけてきた、現代アートの作家である。

■海岸から海岸へ

2015年、またひとつの彫刻作品「海岸から海岸へ(Cost to Cost)」が加わった。木彫ではなくブロンズ像だ。作者ルーク・マーストン(1976-)のルーツは、19世紀中ごろにこの地にやってきたポルトガル人男性と先住民女性との間に生まれた子どもたち。作品には、先住民族の血を引く作者の民族意識が反映している。

21世紀に入って新たに加わったこれら海岸セイリッシュ作家の彫像作品は、トーテムポールに代表されるカナダ西海岸ファースト・ネーションズの文化が脈々と受け継がれ、発展しつづけていることの表れと言えるだろう。

先住民ガイドに学ぶ スタンレーパークの大自然

BC州の太平洋沿岸は温帯降雨林と呼ばれる緑ゆたかな環境だ。この地でトーテムポールが栄えたのも、素材となるシダー（ベイスギ）の巨木がふんだんに手に入ったからだ。

スタンレーパークを訪ねると、車道や水族館周辺などで、大都会バンクーバーの中とは思えない見事なシダー並木や大木を見ることができる。

オーナーでガイドのキャンダス・キャンポさん(左)とラリー・キャンポさん夫妻

地元先住民が運営する観光会社タレイセイ・ツアーズ(Talaysay Tours)ではスタンレーパークを「先住民目線」で案内するツアーをいくつか提供している。その一つ、ここの自然を周遊するトーキング・ツリー(Talking Trees)がとても好評だという。市内バスのターミナルを起点に、周囲の自然を1時間半ほど徒歩で訪ねるツアーだ。

ビーバーの巣（矢印）があるビーバー・レイク

ガイドが出身ネーションについて自己紹介したあと、ツアーに出発。車道の脇道から森に入っていく。まず驚かされるのが、車道の奥に広がる自然の深さだ。原始の時代さながらの鬱蒼とした森にすっぽりと包まれる。

針葉樹の森だけではない。開けた林もあれば湿地もある。スタンレーパークの自然は多様だ。ビーバー・レイクと呼ばれる湿地には、その名の通りビーバーの巣がある。日中にビーバーは出没しないが、季節によっては美しいオシドリの仲間（アメリカオシ）が泳ぐ姿を間近に観ることができる。

アメリカオシのつがい

大都会バンクーバーの中とは到底信じられないような大自然を、ガイドの案内で手軽に堪能できるのはありがたい。しかし、このツアーの魅力はそれだけではない。

時折、樹木や草の傍らに立ち、それら植物を先住民が食物や薬としていかに利用してきたか、ガイド自身の体験談を交えて紹介するのだ。ガイドに教わって木の葉を口に含んだりすることもある。大自然の恵みを享受して暮らしてきたファースト・ネーションズの人たち。彼らのチエにじかに接することで、スタンレーパークの自然をより一層身近に感じ、深く親しむことができる。トーキング・ツリーの人気の秘密はそういうところにあるのだろう。

UBC 人類学博物館　光と陰

バンクーバー市内にあるブリティッシュ・コロンビア大学(The University of British Columbia 略称UBC)の人類学博物館(Museum of Anthropology 略称MOA)は、カナダ西海岸先住民アートの宝庫だ。

館の入口で訪問客を出迎える歓迎の人物像は、スーザン・ポイントの制作。彼女は、「トーテムポール図鑑!?　スタンレーパーク」で紹介した、地元バンクーバーのファースト・ネーション、マスクイム族のアーティストである。

館内で最初に展示されているのもマスクイム族のアートだ。地元のファースト・ネーションに対する敬意が感じられる配置である。

ハイダ族の巨大なトーテムポールに接すると、クマやビーバーなど野生の生きものとの繋がりを重んじる世界観が圧倒的な力で迫ってくる。その力強さを感じることができるのは、やはり実物ならではだ。と同時に、こうした彫刻のスポンサーとなった有力者の財力をも感じさせられる。

トーテムポールが最盛期を迎えたのは意外に遅く、日本では幕末の時代にあたる1830年代から60年代だった。先住民の有力者たちはヨーロッパ人との毛皮交易で大もうけ。その財力を発揮して一家の名声を高めようと、工芸家にたっぷりと謝礼を払い、大きくて立派なポールを競うように彫らせたのである。

MOAで一番広いのは「マンモス大学展示室(Multiversity Galleries)」。日本を含む世界各地の諸民族の膨大な資料が展示されている。

とりわけ充実しているのが、地元カナダ西海岸の先住民族コレクションだ。林立するガラスケースに、木彫りの仮面を始め多種多様な文化財や生活用具がぎっしりと並んでいる。

館内には、古いトーテムポールが安置された一室もある。(＊MOAの呼び物の一つは、トーテムポールが立ち並ぶグレート・ホールだったが、残念ながら現在は改修中)

カナダ西海岸一帯のファースト・ネーションズの貴重な文化財やアートをこれだけ幅広く、また数多く蒐集し、展示している施設は、他にはないだろう。

他方、先住民の立場からすれば、ここに収められているのは彼らの集落から金にモノ言わせて収奪した民族の貴重な文化財に他ならない。トーテムポールについては、1870年代から1920年代にかけて、博物館から派遣されたバイヤーたちが先住民の村々や廃村を訪ね、トーテムポールを奪い去るように持ち帰った歴史がある。MOAの設立自体は1947年だが、母体のブリティッシュ・コロンビア大学では1920年代からトーテムポールを蒐集してきた。MOAに収蔵されている古いポールも、元はといえばどこかの村から持ち去ったものなのだ。

このようにMOAの歴史には「陰」の部分があるが、一方で、ファースト・ネーションズの文化復興に大きく貢献してきた側面もある。まず、現代の先住民アーティストが作品を制作する上で、博物館に保管されていた膨大な文化財が貴重な参考資料となってきた。

それだけでなく、MOAは積極的に先住民文化の復興を支援したのである。1949年、収蔵していたトーテムポールのうち7本の修復をクワクワカワクゥ族のエレン・ニールに依頼する。彼女は、「トーテムポール図鑑!?スタンレーパーク」で紹介したように祖父チャーリー・ジェームズからトーテムポールの制作を学んでいたのだった。エレン・ニールは、彼女と同じくチャーリー・ジェームズの下で修業を積んだ兄弟弟子のマンゴー・マーティンに応援を頼む。二人は検討を重ねた結果、年を経てぼろぼろになったポールを修復するよりも、新しい木材を使ってレプリカを作る方がずっと容易であるとの結論に達した。こうしてトーテムポール復刻プロジェクトが発足。ニールとマーティンは制作に励んだ。

トーテムポールの制作は、熟練した師匠が、弟子に手伝ってもらって進める。マンゴー・マーティンも、若者を呼び寄せて、制作を手伝わせた。彼の弟子たちは、博物館の事業を通して、トーテムポールの制作を体で覚え、トーテムポール作家として育っていった。トーテムポールが復活するためには、制作を発注するスポンサーが必要だ。かつて村の有力者が果たしていたその役割を、博物館が果たすようになったのである。

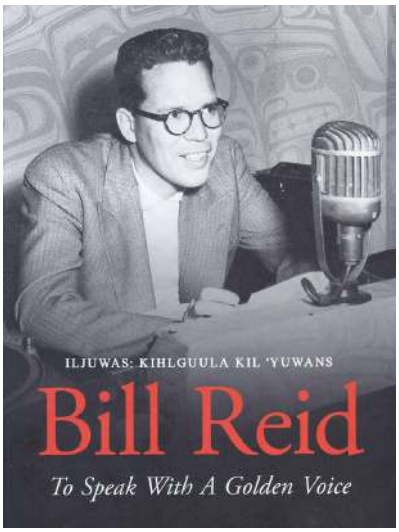
1959年に、MOAはハイダ族の村を再現するプロジェクトを立ち上げた。ハイダの人たちは冬をビッグハウスと呼ばれる木造の家屋で過ごした。MOAに再現されたハイダ村は、1棟のビッグハウスと1棟の遺体安置用家屋、7本のトーテムポールで構成されている。

この企画を発案したのはビル・リードだった。紆余曲折の末に企画が承認されると、彼はプロジェクトの監督を務める。この仕事を通じて、ビル・リードは先住民アーティストとしての経験を積んだ。つまり、MOAは、ハイダ族のトーテムポール制作を復活させると同時に、ビル・リードを育てる上でも大きな貢献を果たしたのだ。

ファースト・ネーションズの現代アート ビル・リード美術館

カナダ西海岸の先住民アートを代表する作家ビル・リード。その生涯は、衰退していたトーテムポール文化が復興し、現代アートとして発展していく歴史そのものだった。彼の経歴を少し詳しくふり返ろう。

ビル・リードは1920年、バンクーバー島の南端にあるBC州の州都ビクトリアに生まれた。少年時代の彼には「先住民らしさ」は乏しかった。母親ソフィーはハイダ人だったが父親はヨーロッパ系で、彼の顔立ちには父親の特徴の方が色濃く出ていた。育ち方にも先住民らしいところはなかった。ソフィーは先住民の同化を図る寄宿舎学校に入れられ、「容貌は先住民だが中身はイギリス人女性」となっていた。そんな母親の下、先住民の社会や文化に触れることなく「白人」として少年時代を過ごしたのである。



「ビル・リード北西海岸アート美術館」特別展パンフレット表紙

1939年、ビル・リードはラジオのアナウンサーとして活躍し始めた。ちなみに彼はすこぶる美声で、「黄金の声」と称された。

1943年、23歳になったリードは、ソフィーの故郷ハイダ・グワイのスケディゲートを初めて訪ねる。そこの住民はほとんどが先住民で、ハイダの伝統的な暮らしの面影が残っていた。

ハイダの社会に触れたことは、若いリードに強烈な印象を与えた。彼の祖父はハイダの伝統的な意匠を活かした銀ジュエリーを制作していた。その姿に、リードは自分も彫金師になりたいとの抱負を抱くようになった。

1948年、カナダ放送協会（CBC）に転職して、トロントに移る。同時に工科専門学校でジュエリー制作コースを受講し、コースを修了すると、工芸会社で彫金の修業を積んだ。

1951年、バンクーバーに転勤。放送局に勤める傍ら工房を設けてジュエリーの制作・販売を行った。トロントで身につけたヨーロッパ流の彫金技術を駆使して、ハイダの伝統的なデザインをジュエリーで表現したのである。彼はアナウンサーとしても大層人気があった。放送の仕事を通して、カナダ西海岸ファースト・ネーションズの先住民アートに関する知識や情報を全国に紹介したのだった。

1956年、彼にトーテムポールの制作を実体験する機会が与えられた。州都ビクトリアでの、マンゴー・マーティン率いるトーテムポール復刻プロジェクトを手伝うことになったのである。期間はわずか10日ほどだったが、名匠マンゴー・マーティンの指導の下トーテムポールの制作に携わったことは、非常に貴重な経験となった。

その3年後、1859年には、既述の通り、リードの提案が承認されてMOAの「ハイダ村再現プロジェクト」が立ち上がる。彼はアナウンサーとして勤めていたCBCを辞め、プロジェクトに専念した。途絶えていたハイダ族のトーテムポール制作というアートは、このプロジェクトによって息を吹き返したのである。

1962年にハイダ村再現プロジェクトが完成すると、同じ年にスタンレーパークの「チーフ・スケダンズのポール」復刻の仕事がつづいた。これらの仕事を通して、リードはトーテムポール制作のノウハウを身につけた。そして、その技術を後進の工芸家たちに伝え、トーテムポール文化の復興に大きく寄与したのである。

ビル・リードの彫刻作品

ハイダ・グワイの精霊

海底世界のチーフ

ワタリガラスと最初の人類

やがてリードは従来のトーテムポールの枠を超えた創作にも意欲を燃やすようになる。ハイダの伝統的な意匠をアレンジして、神話世界をモチーフに、絵画や版画、ブロンズ像など、斬新なアート作品を次々に制作。ハイダの伝統工芸を現代アートへと展開させた。

没年は1998年。78歳だった。

バンクーバーのダウンタウンにあるビル・リード北西海岸アート美術館（Bill Reid Gallery of Northwest Coast Art）は、1,059㎡と小規模ながら彼の業績をビジュアルに伝えている。

館内にはビル・リードの原点である彫金アクセサリーや、木彫作品、彼が制作した大型ブロンズ像のミニチュアなどが並ぶ。

ビル・リードのアート作品だけでなく、彼の経歴が写真や絵とともに紹介されている。CBCアナウンサー時代のマイクなども展示されている。

とりわけ目立つのが壁際のトーテムポール。吹き抜けの2階天井近くにまで達する大きさだ。作者はビル・リードではなく、彼のアシスタントを務めたジェームズ・ハートである。ビル・リードを称えて彫った作品で、タイトルはビル・リードを祝うポール(Celebration of Bill Reid Pole)。2008年の制作だ。

てっぺんのワタリガラスはビル・リードが属する氏族で、胸には彼の顔が彫り込まれている。

その下に嵌め込んだ銅板の盾は、富の象徴であると同時に、描かれた文様はビル・リードが属するオオカミ氏族とワタリガラス氏族を表している。

トーテムポールの制作技法は、実際にポールを彫る作業を通して、師匠から弟子へと伝えられていく。このポールは、まさにビル・リードが多くの後進を育てた証なのだ。

美術館の2階全体と1階のかなりな部分をカナダ先住民作家による現代アート作品が占めている。展示内容は、1階、2階それぞれにテーマが設けられていて、1階コーナーでは年に1回、2階では年に3回、展示内容を入れ替えるという。

こうした作家たちは、ビル・リードから直接薫陶を受けたことはないにしても、彼が切り開いて成功を収めた「先住民族の伝統を活かした現代アート」の継承者だと言えよう。

ビル・リードは、名匠として数多くの傑作を残しただけではない。次世代の後継者たちを育て、さらに、先住民のアートが現代アートとして発展していく道をつけた。ビル・リード美術館では、そんな彼の多様な業績をまるっと俯瞰できるのだ。

付属のギフトショップでは、来館記念の土産物や関連書籍などのほか、先住民作家のアート作品を購入することもできる。

「カナダ」を食べる サーモン・エン・バニック

バンクーバーで評判の先住民料理レストランがサーモン・エン・バニック(Salmon n' Bannock)。2010年の開業だ。

オーナーのアイネス・クックさんはBC州のファースト・ネーション、ヌーハルク族の出身である。まだ1歳にもならない頃、先住民の同化を図る政策により、親から引き離されてヨーロッパ系の家庭に里子に出され、「白人」として育てられた。そのため、民族の言葉も文化も知らずに成長した。

そんな彼女が経営する先住民料理のレストラン。提供されるのは研究を重ねて再現したヌーハルクの伝統料理……ではない。メニューは彼女だけでなくチームが力を合わせて開発する。その際の方針は「先住民の食材を使って、自分が食べてみたい『美味しいもの』をどう作るか」だという。客を満足させるには、「本物の先住民料理」にこだわるのではなく、いかに現代にマッチしたものに作り変えるかが勝負で、そのためには料理人の腕前が欠かせないというのが、彼女の考えだ。

例えば、人気メニューの一つに、ベニザケのソテーをワイルドライスのピラフに乗せたものがある。ベニザケなどサケの仲間は、店名(サーモン)にも使われているようにカナダ西海岸の大切な食べ物。一方のワイルドライスは、東部のファースト・ネーションズを代表する食材だ。一枚の皿の上で二つの遠く離れた先住民の食べ物が出会うわけだ。

ベニザケはオイルと香草で味つけされ、ワイルドライスは油で炒めることによって特有の香りが広がる。料理の付け合わせに出されるのは、これも店名に入っているバニック(bannock)。発酵させてないパンだ。日本では英語の綴り通り「バノック」と呼ばれている。カナダでもそう呼ぶ人が多いらしく、店の名刺の裏にはわざわざ【ban-i k】と書か

れている。発酵させる手間を省いたバニックは、毛皮交易の時代、先住民をはじめ交易の旅に携わった人たちの食糧となっていた。それもあって、代表的なカナダ先住民料理のひとつとされる。

多くの民族が構成する国、カナダ。バンクーバーにも世界各地のレストランが揃っている。フレンチもあればイタリアンもあり中華料理の店もある。インドやウクライナ、ベトナムやタイ、韓国……。和食のレストランも少なくない。そうした中にあって、では、カナダの料理は？と問われた時、それに当てはまるのはサーモン・エン・バニックのようなレストランが供する、先住民が使ってきた食材をベースとした料理ではないだろうか。先住民料理を食べにいく。それはカナダを味わう体験に参加することなのだ

サケ尽くしオードブル

ペミカン・ムース

銀だらのバターソテー

ビクトリア
～うるわしの州都でアート三昧～

バンクーバーからフェリーでバンクーバー島へ。航路を縁取るのは壮大なリアス海岸だ。海から突き出たような山々に霧がたなびく絶景は、並外れた山の幸・海の幸に育まれたファースト・ネーションズの暮らしを偲ばせる。フェリーは1時間半ほどで州都ビクトリアに到着する。

トーテムポールに触れる サンダーバード公園

ビクトリアのダウンタウンは、フェリー・ターミナルから車で小一時間。小さな港を建物が取り巻き、港の一番奥には古風な州議事堂と壮麗なフェアモント・エンプレス・ホテルが鎮座している。町のいたる所に花が溢れ、写真映えのするスポットに事欠かない。

州議事堂とエンプレス・ホテルに挟まれてロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館(Royal British Columbia Museum)とサンダーバード公園(Thunderbird Park)がある。サンダーバード公園の入り口で目を引くのが木造の大きな家屋だ。クワクワカワクゥ族のビッグハウスで、建造者の名前を冠して「マンゴー・マーティン・ハウス」と呼ばれる。

1952年、MOAにつづいてこの博物館でもトーテムポールなど西海岸のアートを復刻するプロジェクトが立ち上がった。MOAでトーテムポールの復元に携わっていたマンゴー・マーティンは、その仕事を終えたあと、ビクトリアに来てトーテムポールの制作に携わった。

数多くの若い先住民工芸家が、助手として制作を手伝った。やがて彼らの中から、ビル・リードをはじめ錚々たるアーティストが輩出する。こうして、滅びかかっていたトーテムポール制作は、マンゴー・マーティンの尽力によって奇跡的な復活を果たした。彼が「トーテムポール復活の父」と称される所以だ。その業績を讃え、マンゴー・マーティン・ハウスは彼と彼の一族に寄贈された。

サンダーバード公園にはトーテムポールが林立している。スタンレーパークではポールの近くに寄ることが禁じられているが、こ

こではポールに触れることもできる。間近でじっくりと「匠の技」を鑑賞したい。

作家に出会える!?
先住民経営の画廊

エンプレス・ホテルのすぐ近く、ハンボルト通りを隔てた隣に位置するヌートカ・コート(Nootka Court)は、トーテムポールが目印。レンガ造りの建物の中に映画館や日本食堂、日本茶の専門店、それに昆虫園などが並ぶ、小粋なショッピングモールだ。

その一角に、クリー族のシャーリー・マクドナルドさんが経営する先住民アートの専門店イーグルフェザー・ギャラリー(Eagle Feather Gallery)がある。店内には木彫や版画、ジュエリーなど、西海岸のものを中心に様々なアート作品が陳列されている。

店主のシャーリーさんと夫君クリスさんは日本で11年間暮らしていたこともあって大の親日家だ。地元のアーティストとの協同がこの画廊のモットーだという。

客にとってもアーティストにとっても来やすい場所にあるのが利点だ。客は画廊でアートを見て、気に入った作家がいたら、自分のための作品を注文することもできる。

指名された作家は、画廊を訪ねた際に、客の意向を詳しく伝えてもらう。制作に使う素材をここで購入することもある。

画廊を訪ねたダグラス・フォーチューン氏(左)。彫刻の素材を吟味している

親子二代に渡ってこうした付き合いをつづけている作家も何人かいるとのことだ。カウィチャン族のダグラス・ラフォーチュンもその一人。ビクトリアの近くにあるダンカンをトーテムの町に変えたアーティストである。

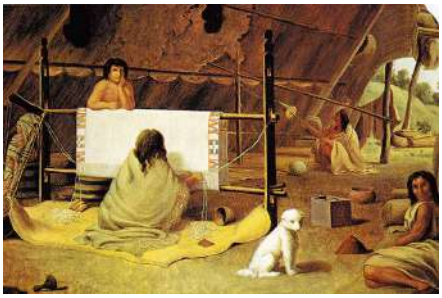
トーテムの町ダンカン

ダンカンは州都ビクトリアから北へ60km。人口5千ほどの小さな町だ。1985年、当時の市長がトーテムの町(City of Totems)を標榜し、トーテムポールによる町興しを図った。と言っても、この町に以前からトーテムポールが立っていたわけではない。町の周辺に住むカウィチャン族の人たちは海岸セイリッシュに属する民族で、トーテムポールを彫る伝統はなかった。そこで、ダンカン市は、ダグラス・ラフォーチュンはじめカウィチャン族の工芸家3人にトーテムポールの制作を依頼した。これを皮切りに、町に立つトーテムポールは増え続け、今では44本に及んでいる。因みにそのうち4本はダグラス・ラフォーチュンの作だ。町では、トーテムポールを見て回るツアーも実施している。

真正カウチン・セーター

カウィチャン族が、脱脂していない太い毛糸で編んだセーターが、日本でもおなじみのカウチン・セーター(Cawichan Sweater)だ。白地に、幾何学模様やワシやタカなど動物の模様が、黒または焦げ茶色の毛糸で編みこまれている。一点一点が手編みのカウチン・セーターは、丈夫で暖かい上に、使われる毛糸にはラノリンという脂がたっぷり含まれているので防水性が高い。寒い季節のアウトドアにはもってこいのウエアだ。

カウィチャン族など海岸セイリッシュはもともと毛布を織ることを得意としていた。彼らの毛布は、シダー(ベイスギ)の樹皮から採った繊維を縦糸に、シロイワヤギなどの毛から紡いだ毛糸を横糸にして織ったもの。毛糸を採るために多毛質の小型犬を飼う人たちもいた。羊と同様にこの犬の毛を刈って利用したのである。



毛布を織る海岸セイリッシュの女性。ポール・ケイン画。右下に毛を採るための犬が描かれている(1856年)

このように、カウィチャン族には毛布を織る伝統はあったが、毛糸の編み物は知らなかった。彼らに編み物を教えたのは、聖アン修道会の尼さんだったとされている。ジェレミナ・コルビンというスコットランド人女性だったという説もある。いずれにせよ、カウチン・セーターの大元の起源は、アイルランドかスコットランドの編み物であると考えられている。

カウィチャン族が作る本物のカウチン・セーターは手編みなので生産数が限られる。世に大量に流通している「カウチン・セーター」の大半は、どこかよその所で作られた「カウチン風セーター」だ。本物には、真正品であることを証明するラベルが付いている。

キャンベルリバー
～ヒグマに会いに先住民の大地へ～

トーテムポール文化圏をこの地に誕生させたのは、巨木の森と溢れるばかりのサケだ。それらはまた、クマやシャチ、ハクトウワシなど、ビッグな野生動物を育んできた。ファースト・ネーションズの人々が共に暮らし、ポールにもその姿を刻む野生の大物たちに、彼らの案内で会いに行く。旅のクライマックスにふさわしい、わくわく体験だ。

トーテムポール息づく町 キャンベルリバー

BC州にはファースト・ネーションズの人たちが運営する「野生動物ウォッチング・ツアー」が何か所かある。その中で、ビクトリアやダンカンの後に訪れるとしたら、比較的近いキャンベルリバーが候補になるだろう。

キャンベルリバーは、バンクーバー島東海岸に面した、人口3万5000人ほどの町だ。町に住む先住民は主にクワクワカワクゥの人たち。様々な所にクワクワカワクゥ様式のトーテムポールが立っている。その数は100柱を超えるという。

集会施設の支柱として使われているトーテムポールもある。

「トーテムポール図鑑!?　スタンレーパーク」で紹介したサンダーバード・ハウスポストと同型で、トーテムポールの原点ともいうべき「ハウスポスト型」トーテムポールの使われ方がよく分かる例だ。

先住民の墓場にもトーテムポールが立てられている。商業施設などの「表札兼広告塔」として使われるものに比べて、精神的な側面が強く、チーフ・スケダンズのポールと同様、故人を悼むというトーテムポールの伝統的な使われ方の一つに近いと言えるだろう。

キャンベルリバーに点在するトーテムポールの多くを彫ったのは、キャンベルリバー在住のビル・ヘンダーソン(1950-)と彼の一家だ。ちなみに、2020年9月、大阪の民族学博物館に新しく立てられた高さ約10mのトーテムポールも彼らの手による。

国立民族学博物館(大阪府)前のトーテムポール

ビル・ヘンダーソン氏と制作中のトーテムポール

ビルの父親サム・ヘンダーソンは、キャンベルリバーの対岸、BC州本土でトーテムポールの制作に携わっていたが、結婚を機にキャンベルリバーに移り住んだ。当時キャンベルリバーでは同化政策により伝統的な文化が絶えようとしていた。サムはトーテムポールの制作をつづけ、この地にトーテムポールを復活させたのだ。ビルはサムからトーテムポール制作を受け継いだ。サムの16人の子どもの中から、ビルを含めて4人のアーティストが育っている。

キャンベルリバーに復興したのはトーテムポールだけではない。1千人を収容できる大きなビッグハウスが建てられ、先住民の儀式などを行うことができるようになった。儀式に欠かせない仮面なども、ヘンダーソン一家をはじめ先住民アーティストによって制作されている。

キャンベルリバー博物館
(Campbell River Museum)

クワクワカワクゥ族のアートや、かつて使っていた生活用具が展示されているほか、ヨーロッパ人との接触の歴史もわかる。キャンベルリバーに来たら是非訪ねたい施設だ。

ヒグマに出会うとっておきの自然体験

キャンベルリバーには、クワクワカワクゥの人たちのほか、海岸セイリッシュに属するホマルコの人たちも住んでいる。

ホマルコ居留地入り口のプレート

ホマルコ居留地内でのカヌーの製作

彼らが運営する「ホマルコ野生動物と文化ツアー(HOMALCO Wildlife & Cultural Tours)」では、8月下旬から10月中旬にかけてヒグマ観察ツアーを催行している。

バンクーバー島にヒグマはいない。しかし、キャンベルリバーとは海峡を挟んで本土側に、ヒグマを間近に観察できる特別の場所がある。そしてそこはホマルコ伝来の地域の中にある。つまり彼らホマルコの人たちは元々本土側に住んでいたのである。

19世紀後半、ホマルコの人たちは、同化を図るカトリック教会の圧力によって元の居住地域から本土の近くにあるソノラ島のオールド・チャーチ・ハウスに移され、さらに20世紀初めにはやはり本土にあるニュー・チャーチ・ハウスに移る。

そのニュー・チャーチ・ハウスも1980年代には廃村となり、1990年代初めにバンクーバー島のキャンベルリバーに移り住んだのである。

ヒグマ観察地はキャンベルリバーから12人乗りのボートでおよそ2時間。その間、入り組んだ海岸線が織りなす素晴らしい景観を堪能し、時にクジラにも出会う。

出会うのは風景や動物だけではない。船上では先住民のガイドがホマルコの歌や言葉を披露し、船がニュー・チャーチ・ハウスの近くに着くと船長が昔の様子を語る。彼自身、かつてその村に住んでいたのだ。廃村を目の前にして先住民自身の証言に耳を傾けるのは、ファースト・ネーションズが運営するツアーならではだ。

オーフォード湾

オーフォード川

ニュー・チャーチ・ハウスはビュート入江(Bute Inlet)の入り口にある。ヒグマ観察ツアーへの上陸地は入江の奥にあるオーフォード湾だ。湾に流れ込むオーフォード川には、秋、おびただしい数のサケが産卵にやって来る。それは他の川も同じだが、違うのは、この川は河口から5kmほど上流に急勾配の滝があって、サケはそれ以上先には進めないのだ。サケは河口から滝までの限られた範囲にとどまり、サケを求めるクマたちもその地域に集中することになる。この川のほとりでヒグマに出会う確率が高いのはそのためだ。

川のほとりのヒグマ観察用櫓

先住民ガイドがクマの生態を現場で紹介

ツアーではバスに乗ってヒグマがよく見られるポイントをチェックして回る。ヒグマ観察用の櫓(やぐら)が設けられている所もあれば、川辺の崖から見下ろす場所もある。いずれも、まずスタッフが先にバスから降り、バスの周囲にクマがいないことを確かめた後、ツアー客が降りる。

すぐ目の前で繰り広げられるのは、人に危害を加える潜在能力を有する大型の「猛獣」ヒグマがサケを獲ったり食べたりする、スリリングな光景だ。

ツアーはスタッフを含めて1グループ15人ほど。クマはそのように多数の人がいることに気づいているはずだが気にする様子はない。ホマルコの人たちは昔からクマを敬い、集落に入って人に危害を及ぼしたりしない限りクマを狩ることはなかったという。それもあって、クマも気を許し、人前に姿を表すのだろう。オーフォード川沿いの観察ツアーは3時間ほどつづく。

カナダの、その奥へ――。

カナダ観光局ウェブサイト「カナダの、その奥へ――。」では、美しい風景や圧巻の絶景の、その奥にある「とっておき」の体験、それぞれの場所や季節によって出会える、色とりどりの物語を紹介しています。カナダの先住民に触れるユニークな体験やストーリー、実際にカナダ先住民体験を味わえるパッケージツアーもご覧いただけます。

詳細はこちら▼

CANADA FOR GLOWING HEARTS

発行／カナダ観光局

@CanadaExplore @canadaexplore explorecanada YouTube Canada Explore - Japan